

## 第一章 死人憑き

## 一

深川は三間町の十間長屋で死人憑きの騒ぎが起こったのは、享和二年（一八〇二）の六月未のころのことだった。死人が生き返って起きあがり、居合わせた人たちを驚かせたのである。

死人の名は吉次、数えて四十になったところの、ろうそくの流れ買いを生業なまわいにしている、ごくおとなしい男だった。長屋の住人たちのあいだでは、もっぱらやもめの吉さんと呼ばれていた。惚れあつていっしょになったおゆうという女房を十年前に亡くして以来、彼が独り身を通していたからである。

三間町の十間長屋は、細い路地をはさんで北森下町に面し、背中に五間堀を背負った町屋の一角の、そのまたいちばん奥まつたところにあつた。日当たりはよくないし、堀のほうか

らじめついた風が吹き込んでくるので、口の悪い連中には「貧乏神も嫌がつて出ていくぜ」などと言われるほどの貧相なところだったが、吉次はこの長屋のなかでも最悪の、共同の廁のすぐ脇にある四畳半ほどの住まいに、もう十年以上も住み着いていた。べらべらの壁一枚を隔てた隣に暮らしている人間大工の竹蔵とおくまの夫婦も、古くからこの長屋に住んでいて、どうかすると、ここの住人たちの暮らしぶりについて、差配さばいよりもよく知っているくらいだったが（とりわけおくまは、向こう三軒両隣の家の店賃の溜め具合などはむろんのこと、夫婦ものところに生まれた赤ん坊がいつごろ仕込まれたかということまでちゃんとつかんでいたりする）、その彼らでさえ、もの静かで道楽ひとつ持つことのないこの隣人の日暮らしのなかに、これといつて変わった事柄を見つけることができないというほど、吉次は目立たない男だった。

「まるつきりね、あなた、紙にかいて壁に張つてある絵みたいな人だよ、吉さんは」  
おくまは、噂話に吉次の名前が出てくると、きまつてそんなふうに言ったものだ。

「紙にかいてさ、こう、ごはんつぶをつぶして壁にはつつけてさ、それでもつて風にひらひらしてただけつてなもんだよ。うちに帰つてきたつて、ことりと音もたてやしないんだからね」

たしかにそれはそうだよと、ほかの女房たちもてんでに頷く。ひとりだけ、

「あんたんところがうるさすぎるんで、聞こえないだけじゃないのかい」と切り返してきた向

かいの女房とは、おくまはいまだに不仲である。

吉次にも、後添いの話はないでもなかった。世話好きの差配や、吉次が買い集めた蠟を持ち込んでいたろうそく問屋のあるじなどが、何度か話を持ちかけたことがあるのだ。だが、そのたびに彼は、

「おれにはおゆうって女房がいるから」

と、亡妻の名をあげて、どこまでも穏やかに、だがきつぱりと断ってしまっていたのだ。た。

「それだよ。それがいけない。おまえがいつまでもそうやって独りで寂しい暮らしをしていたら、誰よりもそのおゆうさんが悲しむとは思わないかね」

差配がひと膝乗り出してそう言ったときも、吉次はにこりと歯を見せて笑い、

「寂しいなんて思ったことはねえですよ、差配さん。おゆうがいるんだから」

と、彼の住まいにある唯一の家具らしい家具である粗末な物入れの上に、いつも挨拶ひとつかないようにきれいに磨いて飾ってあるおゆうの位牌のほうを振り返ってみせた。これで差配はさじを投げた。

ただ、あれの気持ちもわからないではないと、差配にも思うところはあった。吉次の亡妻のおゆうは、お産のために命を落としたのだった。赤ん坊も、おゆうも、両方助からなかったのだ。取り上げ婆の言うことには、逆子だったうえに、臍の緒が赤ん坊の首にからんでい

たのだということだった。

そんなにも酷いかたちで、吉次はいちどきにふたつの幸せをもぎとられてしまった。しかも、その責任の一端が彼にないとは言えない。おゆうを孕ませたのは彼なのだから。

だから吉次は、頭に灸をすえられた亀の子のように、首をひっこめたまま自分のなかに閉じ籠もってしまった。それもいたしかたないことであるかもしれない。一度火傷をした子供が、どれほど手のつけようのない阿呆でも——うちのしょうもない孫はべつとして、と、差配は渋々思った——煮えたぎる薬缶のうえに、二度と手を差し伸べようとしなないと同じだ。

そういう次第で、吉次は静かに暮らしていた。おゆうが亡くなって以来、彼が声をたてて笑うところを見聞きした者はひとりもない。朝はお天道さまといっしょに起きて、そそくさと朝飯をすませ、明六ツにはもう家を出てゆく。ろうそくの流れ買いという商売は、ある程度の縄張りのようなものはあるものの、やはり早く、広く、まめに足を運んだものの勝ちである。それに、当時のろうそくは高級品であったから、とても一般の家庭で使えるようなものではなかった。だからこそ、流れ買いが商売になるのだが、自然と、大店や料理屋、中小の武家屋敷などを廻り歩くことになるので、乱暴な気性の男にはとうてい勤まらない。その点でも、寡黙で腰の低い吉次は実にうってつけだった。武張っていることで名の知れたお先手組の旗本の屋敷などにも出入りして、いいお得意をつかんでいた。

隣のおくまは、毎朝明六ツの鐘とともに、表の障子を静かに開けて、腰に風呂敷包みをくくりつけ、小さな秤をしょって、頭をこぎれいな手ぬぐいで包み、商いに出かけてゆく吉次の姿を、もう数え切れないほど何度も見かけてきた。たとえ鐘の鳴らない日があっても、吉次の家の障子がすると開けば、それが明六ツだと言っているほどに、彼の毎朝の行動は、はかったように正確だった。時折、おくまのほうは夫婦で大酒をくらって、陽の高くなるまでそろって沈没しているようなことがあったが、そういうときでも、するりと開けられる隣の障子の音は、彼女の酒で濁った夢のなかに聞こえてきた。

ところが、六月末のその日の朝は、障子の開けられる音が聞こえなかった。

おくまは、最初のうち、自分が聞き落としたのかと思った。薄べったい夜着から抜け出すとき、大きくさめをしたのでその音にまぎれてしまったのかと思った。

(それにしてもさ……)

障子を開け閉めして、そのあと、どぶ板を踏んで長屋の門のほうへと歩いてゆく、吉次の足音も耳にすることができなかったというのはどういふことだろう。

おくまとて、いつもいつも気をつけて障子の音や吉次の足音を聞いているわけではない。毎朝、それらの物音は、彼女が起きて、夏でも冬でも、まず土間へ降りて水を一杯飲んで飲む——大酒飲みの亭主の習慣が、彼女にもすっかりうつってしまった——そのあいだに、彼女の頭の片隅を、彼女がそれと気づかぬうちによぎってゆくものだった。それは聞こえてい

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。